

佐賀県鹿島市の二型アクセント体系¹⁾

松 森 晶 子

1. はじめに

本稿は、筆者が過去に実施した佐賀県鹿島市方言の韻律体系についての調査報告²⁾である。この方言については、すでにその複合語の韻律型の実態について、松森（2018）に一部だけ報告を行った。本稿ではその複合語の韻律のデータを補足するとともに、この方言のB型の音声的特徴についての観察結果も報告する。

まず複合語については、長崎市方言に記述・報告されている複合語の型の中和が、まったく同じ条件のもとに鹿島市方言でも生じることを報告する。一方、鹿島市方言のB型の韻律については、長崎市のそれとは異なり、その韻律型が実現する文節の最後のモーラに明瞭な下降が観察されることがある、という音声的特徴を報告する。

この鹿島市方言のB型の音声的特徴を説明するために本稿では、九州西南部二型アクセントの祖体系のB型に *…LLH という文節末の1モーラだけが低い韻律型を再建するという松森（2017b）の提案を採用する。そして鹿島市方言では、そのB型の祖型 *…LLH に（おそらくその途中段階に重起伏の韻律型を経て）*…LLH > *…HLH > …HHM (HHL) のような変化が生じ、現代のような韻律型へと発展したという通時的な仮説を提案する。

本稿では、この鹿島市方言を中心とする佐賀県とその周辺の二型アクセント体系に見られるB型の韻律型は、現在さまざまに異なる音声的特徴を持っているという事実を確認する。そして、そのB型の音声的特徴の多様性に焦点を当てて記述を行い、それらの特徴がどのような歴史的プロセスを経て発生したのかについて考えることが、今後の九州西南部二型アクセント体系の通時的考察の進展にとって特に重要な意味を持つことを論じる。

1. 1. 従来の九州西南部二型アクセントの記述研究

鹿島市を含む九州西南部には、語の長さにかかわらず2種類の韻律型が対立する「二型アクセント体系」が分布する（本稿では以下その2種類の韻律型をA型、B型と呼ぶ）。従来の九州西南部二型アクセント体系の記述研究では、それらを「長崎タイプ」と「鹿児島タイプ」という2つのカテゴリーに大別することが一般的に行われてきた。すなわち、「アクセント単位最初の部分に下降が出現する」長崎タイプと、「アクセント単位の末尾のほうにピッチの下降や上昇が現れる」鹿児島タイプといった2つの区分（木部2012：80）である。そして二型アクセント体系を持つ特定の九州西南部方言の記述を開始するに当たっては、まず当該の体系が上述の2つのカ

テゴリーのうちのどちらに属すかを判定することが、その記述の出発点であるとみなされてきた。
 (以下本稿では、アクセントが実現する韻律単位のことを「文節」と呼ぶ。)

しかしながら、実は九州西南部の二型アクセント体系のなかには、この2つのカテゴリーのどちらに属すかを確定できないものもある。そのような体系の一例として松森(2016)は、長崎市近郊の旧・外海町³⁾の韻律体系を挙げている。この体系では、ピッチの下降は(A型だけではなくB型も)文節の(後ろからではなく)初頭部分に出現する。そのためこの方言は、一見したところ「長崎タイプ」に属すかのように見える。しかしながら詳細な音韻分析を施してみると、旧・外海町の体系の弁別の特徴は文節の開始部分ではなく、むしろその末尾のほうに出現するピッチ上昇という韻律特徴であることが判明する⁴⁾。したがってこれを「鹿児島タイプ」と分類することも可能なのである。

このような方言の存在は、そもそも記述の初期段階において、(主として弁別の特徴に基づいて)「長崎タイプ」と「鹿児島タイプ」という2つのカテゴリーにまず大別してから分析を開始することの意味を、根底から問い直す必要があることを示唆している。

1.2. 記述上の方針

いわゆる「長崎タイプ」の二型アクセント体系では、そのA型は(原則的に)文節の頭から数えて2モーラ目にピッチの頂点を持ち、その直後に下がり目为实现する。一方そのB型には、文節全体が高くも低くもなく、全体的に平坦に続く韻律型が実現する。この「長崎タイプ」の代表的体系である長崎市方言の韻律型を、先行研究を参照しながら簡略的に示すと、以下のようになる。なお、以下本稿では〔はピッチの上昇を、〕は下降を、〕はモーラ内部での下降を示す記号として使用する。また文節内部に急激なピッチの下降が観察されない平坦な韻律型については、その文節末尾に＝を付けて示すこととする。

(1) 長崎県長崎市方言の韻律型

		A型		B型
1モーラ名詞	柄	〔エ〕	絵	エ＝
		〔エ〕が		エが＝
2モーラ名詞	歌	〔ウ〕タ	猿	サル＝
		ウ〔タ〕が		サルが＝
3モーラ名詞	煙	ケ〔ム〕リ	頭	アタマ＝
		ケ〔ム〕リが		アタマが＝

長崎市方言ではそのA型の下降は、文節全体が短い場合(2モーラ以下)には〔エ〕ガ(柄が)のように、その文節の頭から数えて第1モーラ目直後に実現する。しかし文節全体の長さが3モーラ以上になった場合には、ウ〔タ〕ガ(歌が)のように、その下降位置は文節の第2モーラ目直後にずれる。ところが文節全体の長さがそれ以上(すなわち4モーラ以上)になっても、ケ〔ム〕リガ(煙が)のように、その下降位置は第2モーラ目直後より後ろにはずれてはいかない⁵⁾。これに対して長崎市方言のB型はエガ＝(絵が)、アタマ＝(頭)などのように、文節全体のど

こにも急激な上昇や下降が観察されない、平坦な韻律型を持つ。

後述するが、本稿で焦点を当てる鹿島市の韻律体系は、その弁別的特徴だけに着目すると、まさに「長崎タイプ」に分類されることになる。長崎市方言と同じく鹿島市方言でも、そのA型の示すピッチの下降は、原則的に文節の開始部分から数えて2つ目のモーラ直後に出現するからである。

しかしこの鹿島市方言のもっとも際立った特徴は、そのB型の韻律型の持つ音声特徴にある。この方言のB型は、(1)に示した長崎市方言のB型の見せる韻律の実現の仕方—すなわち、どこにも急激な上昇や下降が観察されない平坦な韻律型—とは異なる。それは、文節の最後のモーラの直前（すなわち文節の最後尾から数えて2つ目のモーラの直後）に、明瞭な下降を伴うことがあるのである。

鹿島市方言のB型の示すこのような文節末の下降は、名詞に主格の助詞「が」が後続した場合に、特にはっきりと現れる。このようなB型の文節末尾のモーラに観察される明瞭な下降を、今仮にダウンステップ（ピッチの高い状態から中程度に下降すること）を示す記号（↓）を用いて記述するとすれば、次のような韻律型が鹿島市方言の体系には観察されることになる。（なお以下、名詞に助詞が続いた場合の文節はすべて「言い切り形」のではなく、「接続形」である。すなわちその文節で発話を言い切ったのではなく、その後ろに、たとえば「～ある」、「～見える」のように、述語を後続させて発話してもらった場合の韻律型である。）

(2) 佐賀県鹿島市方言の韻律型

		A型		B型
1 モーラ名詞	柄	[イエ =	絵	[イエ =
		[イエ] が		[イエ ↓ が
	戸	[ト =	目	[メ =
		[ト] が		[メ ↓ が
2 モーラ名詞	歌	[ウ] タ	猿	[サ ル =
		ウ [タ] が		サ [ル ↓ が
	羽	[ハ] ネ	芋	[イ モ =
		ハ [ネ] が		イ [モ ↓ が
	星	[ホ] シ	山	[ヤ マ =
		ホ [シ] が		ヤ [マ ↓ が
3 モーラ名詞	煙	ケ [ム] リ	頭	ア [タ マ =
		ケ [ム] リ が		ア [タ マ ↓ が
	田舎	イ [ナ] カ が	蓬	ヨ [モ ギ =
		イ [ナ] カ が		ヨ [モ ギ ↓ が
	畳	タ [タ] ミ	団子	[ダ ン ゴ =
		タ [タ] ミ が		[ダ ン ゴ ↓ が

(2) では、このようなB型の文節末モーラに見られる下降に、仮にダウンステップの記号（↓）

を用いて記述した。しかし実はこの鹿島市方言のB型の文節末の下降は、上述のように（特に2モーラ名詞に主格の助詞「が」が後続した場合に）急激なピッチの下降として現れる。これは「…高高中」と言った程度の緩やかな下降ではなく、むしろ「…高高低」と記述してもよいような、明瞭なピッチの下降である⁶⁾。

しかしながらこのような文節末モーラの明瞭な下降は、B型の名詞から開始する文節に、常に安定して出現するとは限らない。「が」以外の助詞を付加してみると、B型から始まる文節は、場合によっては ムギマデ = (麦まで)、ヤマカラ = (山から) のように、平坦な韻律型で出現することもあるのである。このように常に安定して出現するとは限らない、という点から見ても、このB型の文節の最終モーラに見られる急激な下降は、B型の持つ弁別的な特徴なのではなく、非弁別的な特徴であると言ってよいだろう。

従来の記述研究は、ある韻律体系の記述に当たって、その弁別的な（音韻的な）特徴のみを記述し、非弁別的な（音声的な）特徴はあえて記述に残さないという方針で成されたものが多かった。しかしながら通時的考察の観点からは、このような音声的・非弁別的な特徴は重要である。これは当該の言語体系が発達してきた歴史的プロセスの解明に役立つ手がかりを提供し得るからである⁷⁾。（このような音声的特徴を捨象せずに記述に残すことの意義については、本稿の第3節で論じる。）

以上のような鹿島市方言の音声的特徴を、きわめて単純化した図によって表すとすると、以下ようになる。Hは高いピッチ、Lは低いピッチを示す。

(3) 鹿島市方言の二型アクセント体系における2種類の型の違い

文節全体の長さ	2モーラ	3モーラ	4モーラ	5モーラ
A型	HL	LHL	LHLL	LHLLL
B型	LH	LHL (LHH)	LHHL (LHHH)	LHHHL (LHHHH)

前述のように、仮に「鹿児島タイプ」と「長崎タイプ」という2つのカテゴリーのどちらかに分類するとすれば、鹿島市方言の体系は、あきらかに「長崎タイプ」に属すとせざるをえない。ところがそのB型の韻律型の持つ音声的特徴に着目すると、この韻律体系は、長崎市のそれとはかなり性格が異なると言える。

しかしながら、この鹿島市方言のB型の持つ音声的な特徴の出現の仕方については、現時点では明確な記述結果は得られていない。たとえばこのB型の示す文節末モーラのピッチ下降が、どのような長さの文節に出現するのか、どのような形態素の連続のもとに出現しやすいのか、またはどのような条件のもとには出現しにくいのか、などについて、現時点で確定的なことは何も言えない。このためにはより詳細な調査と、音響分析も視野に入れた分析による検討と確認が必要である。

以上のような理由から本稿では（少なくとも第2節までは）、このB型の文節末の下降については、暫定的にすべての韻律型を ムギマデ = (麦まで) のように平坦な韻律型と見做して記述を行うこととした。したがって以下第2節までのB型の韻律型の記述は、原則的に音声表記ではなく、音韻表記に近いものである。

以上述べたように鹿島市方言では、2モーラ名詞に主格の助詞「が」を後続させると、その文節末のモーラがはっきりと下降し、文節全体に「…高高低」と記述してもよいような韻律型が出現する。鹿島市方言のB型がこのような音声的特徴を備えているため、この条件のもとではA型の2モーラ名詞の示す韻律型との区別がつきにくくなる。たとえばA型の「羽」とB型の「山」に主格助詞の「が」を後続させると、両者ともその文節末に明瞭な下降が出現し ○ [○] ガ（本稿では以下「○」という記号を、モーラを示す記号として使用する。）のように聞こえる⁸⁾からである。

本稿のための調査では鹿島市方言がこのような特徴を持つことが判明したため、名詞に「が」を付加して発話してもらうことをあえて避け、代わりにそれらに2モーラの助詞「まで」を後続させて発話してもらう方針に切り替えて調査を続行した。そうするとA型が ○ [○] マデ のように出現するのに対し、B型が ○ [○マ] デ ～ ○ [○マデ = のような出現の仕方をするので、A型とB型が峻別しやすくなる。なぜなら鹿島市方言では、A型のピッチの下降位置はあくまで文節の頭から数えて2モーラ目直後に出現するのに対して、B型のそれは、文節の最後尾から数えて2つ目のモーラ直後に出現する（したがってB型の低い音調はあくまで文節の最終モーラに現れる）からである。

たとえばA型の語から開始する「羽まで」は「まで」を後続させると ハ [ネ] マデ となる一方、B型の語から開始する「山まで」は ヤ [ママ] デ ～ ヤ [ママデ = のような出現の仕方を示す。そのため両者の韻律型の違いは明確になる。このような条件のもとでは、たとえB型の文節末のモーラに急激なピッチ下降が生じたとしても、A型とB型の違いは、その下がり目の位置の違いとして明瞭に聞き取ることができるからである。

以上のような理由により、本稿のための調査では、すべての名詞や複合語に「が」ではなく「まで」を後続させ、「～まである。～まで見える。」のような文を発話してもらうという方針を貫くこととした。

1. 3. 複合語の型の中和に関するこれまでの記述研究

平山（1951）以来、九州西南部の二型アクセント体系では、複合語の韻律型が規則的に決まることが広く知られている。これは、「複合語の韻律型はその前部要素の韻律型が全体に実現することによって決定する」という規則である。今、次に示すように複合語の前部要素をX、後部要素をY、複合語全体の韻律型をZと呼ぶ。

（4）九州西南部の二型アクセント体系における複合語の韻律

$$X \text{ (前部要素)} + Y \text{ (後部要素)} = Z \text{ (複合語)}$$

そうすると、鹿児島方言を代表とする九州西南部二型アクセント体系では、Xの持つ韻律型がZの韻律型となり、Yの持つ韻律特徴が消滅する。すなわち $Z = X$ （複合語Zの韻律型は、その前部要素Xの韻律型をそのまま引き継いで成り立つ）という法則が、九州西南部の二型アクセント体系の一般的な特徴であることが知られている。

このように複合語全体Zの韻律型がその前部要素Xの韻律型をそのまま継承することによって

決まるという規則は、伝統的に「式保存」と呼ばれてきた。しかし松森（2016）は、このような前部要素の型が複合語全体の型になるようなタイプの規則こそが、（日本語だけでなく琉球語も含めた）諸方言の中でもっとも一般的なもの（さらに通時的に見てもっとも古く、おそらく日琉祖語にまでさかのぼれる可能性のあるもの）である、という仮説を提示した。本稿ではその仮説を採用し、このように前部要素が複合語全体の韻律型を決定する規則のことを、以下「複合語の一般法則」、あるいは単に「一般法則」と呼んで、議論を進めることとする。

しかしながら九州西南部の二型体系のなかには、複合語の一般法則が完全な形で成立せず、2つの型の対立が特定の条件のもとに消滅してしまうような体系が存在することが分かっている（平山 1951：137、坂口 2001）。このことに関する記述は、かなり以前から存在していた。たとえば平山（1951：137-138）はすでに70年以上も前に、佐賀・長崎の複合語について、次のような記述を残している。（なお以下の引用中の下線は、筆者（松森）が付けたものである。）

（5）平山（1951：137）からの抜粋

又、両者の複合語の法則を比較すると、長崎では、

$\overline{\text{ヤエ}}(A) + \overline{\text{サクラ}}(A) = \overline{\text{ヤエザクラ}}(A)$ （八重桜）

$\overline{\text{ムカシ}}(A) + \overline{\text{ハナシ}}(B) = \overline{\text{ムカシバナシ}}(A)$ （昔話）

$\overline{\text{ハナ}}(B) + \overline{\text{ハタケ}}(B) = \overline{\text{ハナバタケ}}(B)$ （花畠）

$\overline{\text{カガン}}(B) + \overline{\text{ハコ}}(A) = \overline{\text{カガンバコ}}(A)^9$ （鏡箱）

などのように、上接語にA型の語が来れば、下接語がA・B何れの型に属していても全体としてA型の複合語となり、それに対して、上接語がB型（尾高）であれば、下接語が何れの型に属しようともB型の複合語になって尾高型となる。但し、

$\overline{\text{トナイ}}(A) + \overline{\text{ムラ}}(A) = \overline{\text{トナイムラ}}(B)$ （隣村）

などのように多少の例外はある。佐賀でもこれと同じく、

$A + A = A$ $A + B = A$

$B + B = B$ （平板） $B + A = B$ （平板）

の法則は共通である。但し、例外はかなり多い。若し、長崎と佐賀との間に複合語に関して違う点を強いて求めるならば、長崎音調に例外が少なく、佐賀音調には多いという一事に過ぎない。

このように長崎県や佐賀県の二型体系にはその一般法則に例外が存在する、という指摘はかなり昔から存在したものの、具体的にどのような条件でそのような例外が生じるかについての詳細な記述は、長い間成されずにいた。そのような状況のなか松浦（2005, 2008, 2014）は、島原市と長崎市の方言を中心に記述・検討を行い、この例外はけっして無秩序に生じるわけではなく、そこには一定の規則性があることを明らかにした。すなわち松浦（2005, 2008, 2014）は、この例外の発生には複合語の前部要素Xの長さ（モーラ数）が関与している、という発見を成し遂げたのである。このことは九州西南部の二型アクセント体系の記述研究史上、大きな貢献であると言えるだろう。

以下は、長崎市の体系に関して松浦（2014：89-90）が提示した、前部要素XがA型の場合の

複合語の例である。(6 a) から分かるように、複合語の前部要素Xが2モーラの場合には一般法則が成り立って、複合語全体Zが前部要素Xと同じ韻律型(A型)になる。しかし(6 b)のように、その前部要素Xが3モーラになると、その法則が成り立たなくなる。この場合、複合語Zの韻律型はその前部要素Xの韻律型であるA型を踏襲せず、すべてB型に変化してしまう。すなわち前部要素Xが3モーラという条件のもとで、A型とB型の区別が消滅してしまうのである。

(6) 松浦(2014: 89-90)の長崎市方言の複合語の例

- a. [ジ]チ + [カ]イ → ジ[チ]カイ (A型 + A型 → A型)
 [ト]リ + コヤ = → ト[リ]ゴヤ (A型 + B型 → A型)
- b. シャ[カ]イ + [シュ]ギ → シャカイシュギ = (*シャ[カ]イシュギ)
 (A型 + A型 → B型)
- ワ[ラ]イ + コエ = → ワライゴエ = (*ワ[ラ]イゴエ)
 (A型 + B型 → B型)

(6 b) は前部要素Xが3モーラの場合の例だが、松浦(2014)は前部要素Xが3モーラ以上の長さの語根から成る複合語のすべてにおいて、前部要素がA型、B型のどちらかに関わらず、その韻律型はB型となることを実証した¹⁰⁾。

以下、このように複合語内部において2つの型の区別が消滅する現象のことを、「型の中和」と呼んで議論を進めることとする¹¹⁾。

2. 鹿島市の複合名詞の韻律型の記述

本稿では鹿島市方言の体系にも、長崎市方言と同様、型の中和が観察されることを報告する。また鹿島市方言の型の中和は、松浦(2014)が長崎市で指摘したのと同じ条件 — すなわち前部要素が3モーラ以上の長さの場合 — に生じることも報告する。すなわち本節では、前部要素Xの長さによって複合語全体Zの韻律型が左右されるという特徴は、鹿島市方言と長崎市方言に共通したものであることを以下に報告する。

2.1. 一般法則の例外が生じる条件について

まず鹿島市方言の複合語規則を概観しよう。すでに1.2.節において述べたように、本稿のための調査では、すべての名詞や複合語に(1モーラの主格助詞「が」ではなく)2モーラの助詞「まで」を後続させ、「～まである。～まで見える。」のような文を発話してもらった。

とりわけ本調査のために作成した複合語は、その前部要素が2モーラ名詞のものが多かったので、まずそれらの単独形について両者の違いをはっきりと実現させ、それがA型、B型のどちらの韻律型を持つかを判定する必要がある。しかし前述のように、特に2モーラ名詞に主格の「が」を後続させた場合には、その名詞がA型、B型のどちらの韻律型なのかを判別することが困難だということが判明したため、すべての名詞や複合語に「まで」を後続させた場合の韻律型を調査することとなった。

さて長崎市方言同様、鹿島市方言でも、前部要素が2モーラの語根から成る複合語においては、一般法則が成立する。これをいくつかの例を用いて簡略的に示したものが、次の（7）である。

（7）は、前部要素が2モーラの場合の複合語の例を示している。これらの例の中の前部要素を構成する語根のうち、「桐、蟬、葱、紙」はA型の、「海苔、草、花、芋」はB型の韻律型を持つ。また後部要素の「箱、籠」はA型、「畑、袋」はB型である。なお、例の中の「…」という記号は当該の文節が「言い切り形」なのではなく、「接続形」であることを示している。

（7） 佐賀県鹿島市方言の複合語 — 一般法則が成り立つ場合

前部要素の型が	A型の場合	B型の場合
桐 キ[リ]まで…	桐箱 キ[リ]バコまで…	海苔 ノ[リ]まで… 海苔箱 ノ[リバコ]まで…
蟬 セ[ミ]まで…	蟬籠 セ[ミ]カゴまで…	草 ク[サ]まで… 草籠 ク[サカゴ]まで…
葱 ネ[ギ]まで…	葱畑 ネ[ギ]バタケまで…	花 ハ[ナ]まで… 花畑 ハ[ナバタケ]まで…
紙 カ[ミ]まで…	紙袋 カ[ミ]ブクロまで…	芋 イ[モ]まで… 芋袋 イ[モブクロ]まで…

ここから前部要素が2モーラの場合には、A型の前部要素を持つ複合語（桐箱、蟬籠、葱畑、紙袋）は複合語全体もA型であり、B型の前部要素を持つもの（海苔箱、草籠、花畑、芋袋）はその複合語もB型であることが分かる。つまり鹿島市方言では、少なくとも前部要素が2モーラの語根から成る複合語には、一般法則が完全に成り立っている。これは長崎市方言と共通した特徴である。

これに対して前部要素が3モーラの語根から成る複合語では、前部要素の韻律型がそのまま複合語の韻律型になるということはない。この場合にはA型とB型の区別が消滅してしまい、どちらもB型となって出現する。これを端的に示しているのが次の例である。これらの例の前部要素の語根のうち、「薬、魚、田舎、小麦」はA型の、「硯、苺、蓬、蜜柑」はB型の韻律型を持つ。また後部要素の「箱、籠」はA型、「団子、畑」はB型である。

（8） 佐賀県鹿島市方言の複合語 — 一般法則の例外

前部要素の型が	A型の場合	B型の場合
薬 ク[ス]リまで…	薬箱 ク[スリ]バコまで…	硯 ス[ズリ]まで… 硯箱 ス[ズリバコ]まで…
魚 サ[カ]ナまで…	魚籠 サ[カナ]カゴまで…	苺 イ[チ]ゴまで… 苺籠 イ[チゴ]カゴまで…
田舎 イ[ナ]カまで…	田舎団子 イ[ナカ]ダンゴまで…	蓬 ヨ[モ]ギまで… 蓬団子 ヨ[モギ]ダンゴまで…
小麦 コ[ム]ギまで…	小麦畑 コ[ムギ]バタケまで…	蜜柑 ミ[カン]まで… 蜜柑畑 ミ[カンバタケ]まで…

（8）に挙げられた複合語は、A型の前部要素を持つもの（薬箱、魚籠、田舎団子、小麦畑）も、B型の前部要素を持つもの（硯箱、苺籠、蓬団子、蜜柑畑）も、両者ともB型で出現していることが分かる。このようにして鹿島市方言でも、前部要素が3モーラの語根から成る場合には、前部要素がA型の場合でも、それがB型の場合でも、その複合語はすべてB型となって出現することが分かった。つまり鹿島市方言では、前部要素が3モーラの語根から成る複合語では2つの韻律型が中和して、その区別が見えなくなってしまう。この特徴は、まさに長崎市方言と一致して

いる。

さてこの節で簡単に述べたことを、以下に具体例を挙げながら検討していくことにしよう。第2.2.節では前部要素が2モーラの語根の場合、第2.3.節ではその前部要素が3モーラ以上の語根の場合についての記述を行う¹²⁾。

2.2. 前部要素が2モーラの語根を持つ複合語の韻律型—鹿島市方言の場合—

結論から先に述べれば、鹿島市方言では前部要素が2モーラの語根を持つ複合語の場合には、A型、B型のどちらにも一般法則が成り立つ。次の(9)には、前部要素も後部要素も2モーラの語根から成る複合語に、助詞の「まで」を後続させた形を示す。後部要素の「箱、籠」は両者ともA型である。この場合、前部要素の韻律型がそのまま複合語全体の韻律型に継承されていることが分かる。

(9) 佐賀県鹿島市方言の一般法則— 前部・後部ともに2モーラの語根から成る複合名詞

前部要素の型

A型

B型

筆 [フ]デ

針 ハ[リ] =

フ[デ]まで

ハ[リ]まで =

筆箱 フ[デ]バコまで

針箱 ハ[リ]バコまで =

鳥 [ト]リ

花 ハ[ナ] =

ト[リ]まで

ハ[ナ]まで =

鳥籠 ト[リ]カゴまで

花籠 ハ[ナ]カゴまで =

同じように前部要素が2モーラの場合の複合語を、調査結果の中から以下に挙げる。これらの例の前部要素のうち、「筆、屑、紙、菓子、鳥、蝉、竹、弦、虫、梨」はA型の、「ゴミ、針、海苔、靴、傘、花、藁、草」はB型の語である。また後部要素の「箱、籠」はA型である。なお続く例はすべて接続形の韻律型なのだが、紙幅の節約のため、以下、当該の文節が接続形であることを示す記号「…」を省略する。

(10) 佐賀県鹿島市方言の複合語の韻律型

—前部要素も後部要素も2モーラの語根から成る場合—

a. 前部要素が2モーラのA型の場合

筆箱 (フ[デ]バコまで)、 屑箱 (ク[ズ]バコまで)、 紙箱 (カ[ミ]バコまで)、
菓子箱 (カ[シ]バコまで)、 鳥籠 (ト[リ]カゴまで)、 屑籠 (ク[ズ]カゴまで)、
蝉籠 (セ[ミ]カゴまで)、 竹籠 (タ[ケ]カゴまで)、 弦籠 (ツ[ル]カゴまで)、
虫籠 (ム[シ]カゴまで)、 梨籠 (ナ[シ]カゴまで)¹³⁾

b. 前部要素が2モーラのB型の場合

ゴミ箱 (ゴ[ミ]バコまで=)、 針箱 (ハ[リ]バコまで=)、 海苔箱 (ノ[リ]バコまで=)、
靴箱 (ク[ツ]バコまで=)、 傘箱 (カ[サ]バコまで=)、 花籠 (ハ[ナ]カゴまで=)、
藁籠 (ワ[ラ]カゴまで=)、 草籠 (ク[サ]カゴまで=)

前部要素がA型の語根を持つ(10a)の語例も、それがB型の(10b)の語例も、複合語全体の韻律型はもっぱら前部要素の韻律型によって決定していることが分かる。すなわちこの条件のもとでは、一般法則が成り立っている。ただしこの場合、後部要素の「箱、籠」がどちらもA型なのは問題である。(10a)の例についてだけ言えば、前部要素ではなく後部要素の韻律型が、複合語の韻律型に反映している可能性も否定できないからである。しかし(10b)の例は、確かにこの条件において一般法則が成り立っていることを示している。これらの例は後部要素の「箱、籠」がA型であるのにもかかわらず、複合語全体は、前部要素の韻律型と同じB型で出現しているからである。

次の例は、前部要素は2モーラだが、後部要素は3モーラの場合の複合語の韻律型を示す。これらの例の前部要素のうち「首、竹、風、水、風邪、傷、笹、鼻、柿、梨、桃、葱、紙、布、箱、羽」はA型、「髪、花、松、糸、粉、胡麻、串、霜、芋、麦、豆、草、綿、腕」はB型である。なお後部要素の「飾り、車、薬」はA型、「油、団子、柱、畑、袋、枕」はB型である。

(11) 佐賀県鹿島市方言の複合語の韻律型

—前部要素は2モーラ、後部要素は3モーラの語根から成る場合—

a. 前部要素が2モーラのA型の場合

首飾り(ク[ビ]カザリまで)、竹飾り(タ[ケ]カザリまで)、風車(カ[ザ]グルマまで)、水薬(ミ[ズ]グスリまで)、風邪薬(カ[ゼ]グスリまで)、傷薬(キ[ズ]グスリまで)、笹団子(サ[サ]ダンゴまで)、鼻柱(ハ[ナ]バシラまで)、柿畑(カ[キ]バタケまで)、梨畑(ナ[シ]バタケまで)、桃畑(モ[モ]バタケまで)、葱畑(ネ[ギ]バタケまで)、紙袋(カ[ミ]ブクロまで)、布袋(ヌ[ノ]ブクロまで)、水枕(ミ[ズ]マクラまで)、箱枕(ハ[コ]マクラまで)、羽枕(ハ[ネ]マクラまで)

b. 前部要素が2モーラのB型の場合

髪飾り(カ[ミ]カザリまで)、花飾り(ハ[ナ]カザリまで)、松飾り(マ[ツ]カザリまで)、糸車(イ[ト]グルマまで)、粉薬(コ[コ]グスリまで)、胡麻油(ゴ[マ]アブラまで)、松油(マ[ツ]アブラまで)、串団子(ク[シ]ダンゴまで)、霜柱(シ[モ]バシラまで)、芋畑(イ[モ]バタケまで)、麦畑(ム[ギ]バタケまで)、花畑(ハ[ナ]バタケまで)、豆畑(マ[メ]バタケまで)、胡麻畑(ゴ[マ]バタケまで)、芋袋(イ[モ]ブクロまで)、草枕(ク[サ]マクラまで)、綿枕(ワ[タ]マクラまで)、腕枕(ウ[デ]マクラまで)

この場合も、前部要素の韻律型が複合語全体の韻律型を決定していることが分かる。すなわち(11)の例においても、一般法則は完全に成り立っている。

以上をまとめると、鹿島市方言では「前部要素の長さが2モーラ」という条件においては一般法則が完全に成り立ち、複合語Zの韻律型は、もっぱら前部要素Xの韻律型によって決定することが明らかになった。

2. 3. 前部要素が3モーラ以上の語根を持つ複合語—鹿島市方言の場合—

これに対し前部要素が3モーラ以上の場合には、鹿島市方言では一般法則が成り立たない。すでに(8)では、前部要素が3モーラの複合語の例を一部検討したが、次の(12)の例には、前部要素が3モーラの場合だけではなく、それが4モーラの場合の複合語も含まれている。これらの前部要素のうち、「薬、魚、小麦、弁当、千両、人参」はA型の、「硯、宝、漆、蜜柑、苺、鼠、象牙、郵便、賽銭、オレンジ」はB型の韻律型を持つ。なお後部要素はすべて2モーラの語根から成るが、そのうち「箱、籠」はA型で、「色」はB型の韻律型を持つ。

(12) 佐賀県鹿島市方言の複合語の韻律型—前部が3・4モーラの語根から成る場合

a. 前部要素が3・4モーラのA型の場合

薬箱 (ク [スリバコまで=)、魚籠 (サ [カナカゴまで=)、小麦色 (コ [ムギイロまで=)、
 弁当箱 ([ベントーバコまで=)、千両箱 ([センリョーバコまで=)、
 人参色 ([ニンジンイロまで=)

b. 前部要素が3・4モーラのB型の場合

硯箱 (ス [ズリバコまで=)、宝箱 (タ [カラバコまで=)、漆箱 (ウ [ルシバコまで=)、
 蜜柑箱 (ミ [カンバコまで=)、苺籠 (イ [チゴカゴまで=)、鼠色 (ネ [ズミイロまで=)、
 象牙色 ([ゾーゲイロまで=)、郵便箱 ([ユービンバコまで=)、
 賽銭箱 ([サイセンバコまで=)、オレンジ色 (オ [レンジイロまで=)

この例から分かるように鹿島市方言では、前部要素が3・4モーラの長さの語根から成る場合は、それがA型であるかB型であるかに関わらず、複合語全体の韻律型はすべてB型となって出現する。つまりこの条件のもとでは型の中和が起こり、2つの型の区別が消滅してしまう。この点も鹿島市方言は、長崎市方言と完全に一致している。

さて複合語全体がさらに長くなると、そこにはどのような規則性が見られるのだろうか。この点については今のところ予備調査の段階にとどまっているが、以下にデータの一部を公表する。次の例は、前部要素、後部要素とも3モーラの語根から成る6モーラの長さを持つ複合語の例である。前部要素を構成する語根のうち、「椿、菜種、田舎、小豆、小麦、キャベツ、トマト、あられ、氷」はA型の、「柱、蓬、茄子、苺、蜜柑、南瓜、匂い、俵」はB型の韻律型を持つ。なお、後部要素のうち「飾り」はA型で、「油、団子、畑、袋、枕」はB型である。

(13) 佐賀県鹿島市方言の複合語の韻律型—前部要素も後部要素も3モーラの語根から成る場合

a. 前部要素が3モーラのA型の場合

椿油 (ツ [バキアブラまで=)、菜種油 (ナ [タネアブラまで=)、田舎団子 (イ [ナカダ
 ンゴまで=)、小豆団子 (ア [ズキダングまで=)、小麦畑 (コ [ムギバタケまで=)、小豆
 畑 (ア [ズキバタケまで=)、キャベツ畑 (キャ [ベツバタケまで=)、トマト畑 (ト [マ
 トバタケまで=)、あられ袋 (ア [ラレブクロまで=)、氷枕 ([コーリマクラまで=)

b. 前部要素が3モーラのB型の場合

柱飾り (ハ [シラカザリまで=)、蓬団子 (ヨ [モギダングまで=)、茄子畑 (ナ [スビバ

タケまで=)、苺畑 (イ [チゴバタケまで=)、蜜柑畑 (ミ [カンバタケまで=)、南瓜畑 (カ [ボチャバタケまで=)、匂い袋 (ニ [オイブクロまで=)、俵枕 (タ [ワラマクラまで=)

この場合も前部要素がA型であるか、B型であるかに関わらず、複合語全体の韻律型はすべてB型になっていることが分かる。ただし後部要素がA型のものが、(13)の複合語の中には「柱飾り」の一例しかないのは問題である。これらがB型になるのは、後部要素の韻律型の影響である可能性を否定できないからである。

このような欠点を補填するために、後部要素を4モーラのA型とB型に固定したうえで、前部要素に3モーラ以上の語根を持ってきた複合語を作成し、その韻律型を検討する調査を試みた。まず前部要素については、3モーラ以上の次のような地名に設定した。

(14) 佐賀県鹿島市方言の3モーラ以上の地名の韻律型

A型: 名古屋 (ナ [ゴ] ヤまで)、大阪 ([オー] サカまで)、鹿児島 (カ [ゴ] シマまで)

B型: 博多 (ハ [カタまで=)、東京 ([トーキョーまで=)、沖縄 (オ [キナワまで=)

これらの名詞を前部要素にして、後部要素に「方言、名物、見物」を後続させ、複合語全体を7モーラ以上にした場合の韻律型を調べた結果、次のようなデータを得た。なお後部要素のうちの「方言、名物」はA型、「見物」はB型である。

(15) 佐賀県鹿島市方言の3モーラ以上の地名を前部要素に持つ複合語

a. 前部要素が3モーラ以上のA型の地名から成る場合

名古屋方言 (ナ [ゴヤホーゲンまで=)、大阪方言 ([オーサカホーゲンまで)、
鹿児島方言 (カ [ゴシマホーゲンまで=)、名古屋名物 (ナ [ゴヤメーブツまで=)、
大阪名物 ([オーサカメーブツまで)、鹿児島名物 (カ [ゴシマメーブツまで=)、
名古屋見物 (ナ [ゴヤケンブツまで=)、大阪見物 ([オーサカケンブツまで=)、
鹿児島見物 (カ [ゴシマケンブツまで=)

b. 前部要素が3モーラ以上のB型の地名から成る場合

博多方言 (ハ [カタホーゲンまで=)、東京方言 ([トーキョーホーゲンまで=)、
沖縄方言 (オ [キナワホーゲンまで=)、博多名物 (ハ [カタメーブツまで=)、
東京名物 ([トーキョーメーブツまで=)、沖縄名物 (オ [キナワメーブツまで=)、
博多看物 (ハ [カタケンブツまで=)、東京見物 ([トーキョーケンブツまで=)、
沖縄見物 (オ [キナワケンブツまで=)

(15)に挙げられた複合語の韻律型は、後部要素の語根がA型であっても、それがB型であっても、すべてB型となっていることが見て取れる。以上のことから、複合語全体の型の決定には、その後部要素の韻律型は関与していないことが推測できる。

すなわち、長崎市方言と同じく鹿島市方言でも、複合語の韻律型の決定には前部要素の韻律型と長さだけが関与していることが明らかになった。前部要素が2モーラの場合には一般法則が成

り立つのに対し、それが3モーラ以上という条件のもとでは複合語の韻律型が中和し、(前部要素の韻律型がA型、B型のどちらであっても)複合語全体の韻律型はすべてB型になる、という結果が得られた。

2.4. 鹿島市方言の複合語の韻律規則

以上、鹿島市方言では前部要素が3モーラ以上の場合には、その前部要素の語根がA型であっても、B型であっても、複合語全体の韻律型はB型になることが分かった。つまり、3モーラ以上の語根を前部要素に持つ複合語はすべてB型に集約し、一般法則はそこには成り立たなくなる。このようにして、松浦(2008, 2014)によって長崎市方言ですでに証明されているものと同じ特徴が、この鹿島市方言にも見られることが分かった。

なお、(13)や(15)の例を参照しながら推理すれば、後部要素の長さ(モーラ数)、あるいは複合語全体の長さ(モーラ数)は、鹿島市方言の複合語の韻律型の決定には関与していないということになる。この点については、引き続き条件を変えた複合語をさらに作成して調査・検討をしなければならない。これは今後の課題としたい。

さて鹿島市方言では、前部要素がA型でしかも2モーラの長さを持つ複合語には、「笹団子(サ[サ]ダンゴまで)」、「葱畑(ネ[ギ]バタケまで)」のように複合語全体もA型となって一般法則が成り立つのに対し、そのA型の前部要素が3モーラ以上になると、「小豆団子(ア[ズキダンゴまで=)」、「トマト畑(ト[マトバタケまで=)」のように複合語全体はB型となり、その結果、体系内部の2つの韻律型が中和してしまうことが明らかになった。

以上の結果をもとに鹿島市方言の複合語規則をまとめると、次のようになる。

(16) 佐賀県鹿島市方言の複合語の韻律規則

- a. 前部要素Xが2モーラの語根から成る場合：一般法則($Z=X$)が成り立つ。すなわち前部要素XがA型の場合でも、それがB型の場合でも、前部要素Xの韻律型が複合語Zの韻律型となる。
- b. 前部要素Xが3モーラ以上の語根から成る場合：前部要素XがA型かB型かに関わらず、複合語Zの韻律型はすべてB型となる。

(16b)に示したように鹿島市方言では、前部要素が3モーラ以上の語根の場合には、その前部要素の語根がA型であってもB型であっても、その複合語はB型になる。しかもこのような現象は、単なる「傾向」や、一部の限られた語彙だけに痕跡的に残っている過去の規則性の名残りのようなものなのではない。なぜなら、たとえば(15)に挙げられた複合語は、そのままの形でレキシコンに搭載されている(したがって話者がその韻律型をひとつひとつ丸ごと覚えている)ようなタイプの複合語ではないからである。

このことは、この(16b)に記述された韻律規則は、現代の鹿島市方言の話者の頭の中に実際に生きて働いている(生産的な)規則であることを物語っている。したがって今後、3モーラ以上の長さの新語や、新たにこの言語体系に取り入れられた外来語などを前部要素に持ってきて同様な調査を行ったとしても、おそらく鹿島市方言では(16)に記述された規則が成立するのでは

ないと思われる。この点についても、今後の調査の課題としたい。

以上、長崎市方言と同じく鹿島市方言でも、「その前部要素が3モーラ以上の語根から成る」という条件のもとに複合語の韻律型が完全に中和し、その結果、A型とB型の区別が消滅してしまうことが分かった。したがって松浦（2014：89-90）が長崎市方言の複合語で明らかにした複合語の規則は、そっくりそのまま鹿島市方言にも当てはまることが明らかになった。

3. 鹿島市方言のB型の音声的特徴とその通時的意味

さて本稿で見てきたように、鹿島市方言の韻律体系は長崎市方言のそれとの共通点が多い。鹿島市方言のA型は、原則的に文節の頭から数えて2つ目のモーラ直後にピッチの下がり目を持つが、まずこの点が長崎市方言と一致している。またその複合語規則については、前部要素が3モーラ以上という条件のもとに2つの韻律型の中和が起こるという点も、鹿島市方言は長崎市方言と完全に一致している。このことから、鹿島市方言と長崎市方言は、通時的に見ても近い関係にある（系統関係が近い）言語体系であることが推測できる。

しかしながら、すでに第1.2.節で見てきたように、鹿島市方言のB型の韻律型は、長崎市方言のそれとは異なる音声的特徴を持っている。(1)で見たように長崎市方言のB型は、文節全体を通して急激な上昇や下降が観察されない平坦な韻律型を持っている。これに対して鹿島市方言のB型は、(2)に示したように、文節の最後のモーラの直前（すなわち文節の最後尾から数えて2モーラ目の直後）に、急激なピッチの下降を伴って出現することがある。

3.1. B型の韻律型の音声的特徴

このように鹿島市方言のB型には、平坦な韻律型の代わりに、文節の最後のモーラに明瞭なピッチ下降が観察されることがある。前述のように、このようなB型の音声的特徴は名詞に主格の「が」を後続させた場合に、特に顕著に出現する。そのため鹿島市方言では、特に2モーラの名詞に「が」を後続させた文節ではA型とB型の2種類の韻律型が「中和する」といってもよいほどの共通性を見せる¹⁴⁾。たとえばA型の「鼻、酒、水、紙、鳥、虫」等とB型の「花、馬、米、山、豆、舟、鍋」等に「が」を後続させると、両者とも○[○]ガのような韻律型に聞こえてしまうのである。

このようなB型の音声的特徴に着目すれば、鹿島市の韻律体系は、長崎市のそれとはかなり性質が異なっていると言えるだろう。

さらに着目すべき点は、この鹿島市方言のB型の文節では、常にその末尾モーラが低く付くとは限らないことである。B型の文節には、カ[サマデ=（傘まで…）、ス[ズリマデ=（硯まで…）]のように、平坦な韻律型が観察される場合も多い。すでに1.2.節で述べたように、鹿島市方言では「まで」を後続させた場合に、B型が平坦に出現することが多かった。

またこのようなB型の特徴は、（たとえば2モーラ名詞に主格の「が」を後続させたような）文節全体が比較的短い場合にのみ出現し、長くなるとそれが次第に平坦になっていく、というような出現の仕方を示すとは限らない。文節全体が比較的長い場合にも、（平坦な韻律型とともに）文節末モーラのピッチが低く付くような韻律型が観察された。たとえばス[ズリバコマデ=（硯箱まで…）、[ベントーバコマデ=（弁当箱まで…）]のように文節全体が比較的長い場合にも、何

度か繰り返し発話してもらおうと、文節末のモーラが低まって、ス[ズリバコマ]デ、[ベントーバコマ]デのように聞こえることがあった。

現時点では、どのような条件のもとにこの文節末の1モーラがはっきりと下降し、どのような条件のもとにその下降の出現が抑えられて文節全体が平坦に実現するのか、ということについての分析結果は得られていない。したがって、鹿島市方言のB型の持つ音声的特徴の出現の仕方については、名詞やそれに後続する助詞の長さ（モーラ数）などの条件を変えてさらに調査を続行し、より詳しい観察・記述を行う必要がある。

さて、文節末の1モーラだけが直前のモーラよりも低く付くようなB型の韻律型の存在は、この鹿島市方言に限ったことではない。これと似たような現象は、他の九州二型アクセント体系にも報告がある。たとえば平子・五十嵐（2016a）は、佐賀県の旧杵島郡江北村出身の話者の発話では、B型の語に1モーラの助詞が続くと、ウ[チワ]デ（団扇で）のように、その助詞が当該の名詞の語末モーラよりも低いピッチで実現することを観察・記述している。また松森（2017b: 59）は、佐賀県の藤津郡太良町方言においても、B型の名詞から開始する文節には、ア[タマ↓ガ（頭が）]のように、その文節末尾のモーラが直前のモーラよりやや低いピッチで実現することを報告している¹⁵⁾。さらに平子・五十嵐（2016b）は、熊本県の玉名市方言においても、4モーラ以上のB型の名詞が、その文節末尾から数えて2つ目のモーラ直後にピッチの下降を伴った型で出現することを報告している¹⁶⁾。

これら、現代の佐賀県やその周辺地域の二型アクセント体系の諸方言に観察されるB型の示す音声的特徴は、いったいなぜ、どのような歴史的過程によって生じてきたのであろうか。本稿ではこのことは特に通時的な観点から見て重要な課題であると捉え、以下に焦点を当てて論じる。

3. 2. B型の韻律特徴の発生に関する通時的仮説

さてこれまで述べてきたように、鹿島市方言はその弁別的特徴のみに着目して分類すれば、「長崎タイプ」に属することになる。その長崎タイプの代表である長崎市方言は、文節の頭から数えて原則的に2つ目のモーラまでが高く、その直後にピッチが下降する韻律型（A型）と、その文節が高くも低くもなく、平坦に実現する韻律型（B型）から成る。今、アクセント体系内の高い音調を持つモーラを●で、低い音調のモーラを○、高くも低くもない（中ぐらいの）音調のモーラを◎で示すことにすると、長崎市方言の体系は次のように図式化することができる。（なおここでは文節の頭の低い音調は発話の出だしを示す音調と捉え、記述には反映していない。）

(17) 長崎市方言の二型アクセント体系における2つの韻律型の違い

文節の長さ	2モーラ	3モーラ	4モーラ	5モーラ	6モーラ
A型	●○	●●○	●●○○	●●○○○	●●○○○○
B型	○○	○○○	○○○○	○○○○○	○○○○○○

これに対し本稿で記述の対象にした鹿島市方言の体系では、そのB型が長崎市方言のような平坦な韻律型を持つとは限らず、その最終モーラに顕著な下降が観察されることがある。これを図式化すると、次のようになる。

(18) 鹿島市方言の二型アクセント体系における2つの韻律型の違い

文節の長さ	2 モーラ	3 モーラ	4 モーラ	5 モーラ	6 モーラ
A型	●○	●●○	●●○○	●●○○○	●●○○○○
B型	●○	●●○	●●●○	●●●●○	●●●●●○
	●●	●●●	●●●●	●●●●●	●●●●●●

従来の研究では、九州西南部に分布するさまざまな二型アクセント体系を、「長崎タイプ」と「鹿児島タイプ」という2つのカテゴリーに分類してきた。そのような分類の過程では音韻的・弁別的特徴のほうに重きが置かれ、(18)に示したB型の文節末に観察されるピッチの下降のような音声現象には、特に光が当てられることはなかった。おそらく多くの記述研究が、このような非弁別的な特徴は、当該の韻律体系の本質的な特徴ではないと見做して、記述の対象から除外してきたのではないと思われる。

このような背景があるためであろう。たとえば佐賀県各地の二型アクセント体系においてこのB型の示す文節末の下降が、どのような条件のもとに（どのような長さの文節に、どのような形態素の連続のもとに）出現するのか、またどのような場合には出現しにくいのか、という視点から成された記述研究は、管見の限り存在しない。

さて平子・五十嵐（2016b：9）は、熊本県玉名市方言のB型の文節末尾モーラのピッチ下降について、この現象はある種のイントネーションではないかとする仮説を（暫定的にはあるが）提示している。すなわちこれは、単独発話時に見られる「接続形」か「言い切り形」かの違いによって出現するようなイントネーションが、そのB型の文節末尾に出現している、という見方である。

これに対し本稿では、特に鹿島市方言のB型に出現する文節末のピッチ下降に関連して、次のような通時的な観点からの仮説を提示しておきたい。すなわち、このB型の文節末尾モーラのピッチ下降は、かつてこの方言の祖体系において、そのB型が *…LH のように文節末のモーラだけが高くなるような韻律型を持っていたことを意味する。この祖型 *…LH には、その後その文節の頭にあらたにH音調が生じ、その結果B型は、ひとつの文節内に2つの高いピッチの山が出現する重起伏の韻律型（すなわち一つの文節内に2つのH音調の頂点を持つ *H…LH のような韻律型）に変化した。その重起伏の韻律型の一つ目のH音調が、歴史的変化の過程で次第に文節の後ろのほうに拡張していった結果、文節末モーラのH音調と衝突し、後者のH音調を一段階低くした¹⁷⁾。以上のような仮説である。

今その変化のプロセスを、4モーラの長さの文節を代表にとって示せば、次のようになる。Hは高いピッチ、Lは低いピッチ、Mは中くらいのピッチのモーラを示す。

(19) 現代の鹿島市方言のB型に過去に生じたと想定される変化の過程（仮説）

*LLLH	>	*HLLH	>	*HHLH	>	HHHM (HHHL)
語頭隆起		H音調の後ろへの拡張		ダウンステップ		

なお (19) には現代のB型の型を HHHM としてあるが、(少なくとも聴覚印象では) 鹿島市方言の文節末の1モーラははっきりと低く付くことがあるため、カッコ内に HHHL のように記してある¹⁸⁾。鹿島市方言のB型に見られる文節末尾のピッチ下降は、(19) のような歴史的変化のプロセスを経て生じたのではないかというのが、本稿が提示した仮説である¹⁹⁾。

つまり本稿では、鹿島市方言の文節の最後尾から数えて2モーラ目直後に観察されるピッチの急激な下降は、過去の韻律型のひとつの痕跡として捉えることができるという通時的な仮説の提案を行ったことになる。

ところで松森 (2017b) は、現在は文節全体にわたって MMMM や HHHH のように平坦な音調が持続する長崎県や佐賀県の多くの地域のB型も、かつてはLLLHのように、その文節の末尾モーラのピッチが上昇する韻律型を持っていたのではないかと推定した²⁰⁾。本稿ではこの松森 (2017b) の提示した仮説にしたがい、九州二型アクセントの祖体系のB型に *LLLH のような文節末の1モーラだけが高くなるような韻律型を再建し、提案する。

つまり本稿は、九州二型アクセントの祖体系のB型は、そもそも *HLLH のような重起伏の韻律型へと変化を遂げやすいような祖型 (*LLLH) を持っていた、と考えるのである。そして佐賀県一帯の二型アクセントの祖体系のB型は、すべて *HLLH のような重起伏の韻律型を経て、現代のような韻律型へとそれぞれ変化したという仮説を、本稿では提案する²¹⁾。

3. 3. 九州の二型アクセント体系におけるB型の韻律特徴の多様性とその通時的意味

祖体系のB型が重起伏の韻律型へと変化しやすい祖型 (*LLLH) を持っていたと考える根拠のひとつとして、鹿島市を代表とするこの佐賀県の二型体系を取り巻くように分布する二型アクセント体系のB型に、実際に重起伏の韻律型が観察される体系が存在していることが挙げられる。たとえば松森 (2017a) の記述した長崎県旧・外海町方言の二型アクセント体系には、次のような韻律型が報告されている。(旧・外海町については本稿の第1. 1. 節においても言及した。)

(20) 長崎県旧・外海町方言の二型アクセント体系における2つの韻律型の違い

文節の長さ	2モーラ	3モーラ	4モーラ	5モーラ	6モーラ
A型	●○	●●○	●●○○	●●○○○	●●●○○○
B型	○●	●○○	●●○○	●●○○○	●●○○○○
		○○○			●●●○○○

この旧・外海町方言のB型は、文節の最後の1モーラのピッチが急激に上昇する。それと同時に語頭から1～3モーラ目までのピッチが高くなり、その結果B型には、一つの文節内に2つの高いピッチの頂点を持つ重起伏の韻律型が出現する。

似たような重起伏の韻律型は、松森 (2018) が記述・報告した熊本県葦北郡芦北町の田浦方言の二型アクセント体系のB型にも観察されている。次に見られるように、この体系でもそのB型の文節には、2つの高いピッチの頂点が観察されている。

(21) 熊本県芦北町田浦方言の二型アクセント体系における2つの韻律型の違い

文節の長さ	2 モーラ	3 モーラ	4 モーラ	5 モーラ	6 モーラ
A型	●○	●●○	●●●○	●●●●○	●●●●●○
B型	○●	●○●	●●○●	●●○●●	●●●○●●
				●●●○●	●●●●○●

(20) に示した旧・外海町方言と同様、この方言でも、文節全体の長さが3モーラ以上になると、B型の文節の頭のほうに高いピッチの山が出現し、その結果、一つの文節内に2つのピッチの頂点を持つ重起伏の韻律型が出現する。

以上の事実、九州二型アクセント体系の祖体系のB型が、●●○●のような重起伏の韻律型へと変化を遂げやすいような祖型(*LLLH)をもともと持っていた、と考える根拠となる。

さて、(20) や (21) に示した韻律体系に観察されているB型の(●○●や●●○●のような)重起伏の韻律型は、かつては鹿島市方言を代表とする佐賀県各地の二型アクセント体系にも存在していたのではないかと、というのが本稿の提示する通時的な仮説である。すなわち本稿では、現代の鹿島市方言などの佐賀県の二型アクセント体系の諸方言のB型も、かつては(20) や (21) に示したものと同じような重起伏の韻律型を持っていた時代があるのではないかと推定するのである²²⁾。

特に注目されるのは、現代もB型に重起伏の韻律型が観察される上述の2つの韻律体系(20) と (21) は、地理的に見ると、(17) や (18) に示した長崎市や鹿島市の体系を取り巻くように分布していることである(42ページの図1を参照)。この点をもとに本稿は、長崎市や鹿島市の体系では、(20) や (21) の体系より一足先に、そのB型が重起伏の状態へ変化を遂げた²³⁾と推定する。

しかしながら(17) や (18) に示した長崎市や鹿島市の体系では、*HLLH > HHHH ~ HHHM ~ HHHL のように、その重起伏の韻律型が、現代に見られるような平坦な(あるいは文節内部の2つのH音調の山の衝突が起こったことを契機にして文節末モーラだけが下降するような)韻律型へと変化を遂げてしまった。その結果、これら長崎市や鹿島市の体系では、重起伏の韻律型はすでに消滅してしまった、と考えるのである²⁴⁾。

さて、(20) と (21) の2つの体系に共通しているのは、単に重起伏の韻律型がB型に見られるという事実だけではない。両者は、そのB型の2つ目のピッチの頂点が、たとえば●●○●のように、文節の最後のモーラに出現するという点においても一致している。つまり文節の最後尾のモーラが急激なピッチ上昇を示すという点において、(20) と (21) の体系のB型は、共通した特徴を持っているのである。

ところで現代の長崎県には、そのB型に(20) や (21) のような重起伏が観察されない体系も存在している。長崎県東彼杵郡の波佐見町^{ひがしそのぞぐん はさみちやう}の体系である。次に示すようにこの波佐見町のB型は、その文節の最終モーラだけが急激なピッチの上昇を伴って出現する²⁵⁾。この点においてこの体系は、同じ県内の長崎市のB型とも、その音声実現の仕方が大きく異なっている。

(22) 長崎県波佐見町方言の二型アクセント体系における2つの韻律型の違い

文節の長さ	2 モーラ	3 モーラ	4 モーラ	5 モーラ	6 モーラ
A型	●○	●●○	●●○○	●●○○○	●●○○○○
B型	○●	○○●	○○○●	○○○○●	○○○○○●

(20) や (21) の体系のそれとは異なり、この波佐見町方言のB型は、いまだに重起伏の韻律型へと変化を遂げていないものと考えられる²⁶⁾。

さてこれまで見てきた二型アクセント体系を持つ九州諸方言のB型の示す音声特徴を、ここで概観してみよう。4モーラの文節を代表として取り上げて示すと、次の表に挙げたようになる。

(23) 九州二型体系のB型に出現する韻律型の特徴の違い（カッコ内は本稿内で言及した箇所を示す。）

長崎県 長崎市 (17)	佐賀県 鹿島市 (18)	佐賀県藤津郡 太良町 (注15)	長崎県旧・ 外海町 (20)	熊本県芦北町 田浦 (21)	長崎県波佐見 町 (22)
○○○○○	●●●○ ~●●●●	●●●○	●●○●	●●○●	○○○●

一見して、鹿島市方言を取り巻く諸方言の韻律体系では、B型の韻律型が非常に多様な音声的特徴を伴って出現していることが分かる。とりわけ印象的なのは、佐賀県鹿島市と長崎県波佐見町の体系におけるB型の違いである。鹿島市方言のB型は（●●●○のように）文節の最終モーラがはっきりと下降することがあるのに対して、波佐見町方言では（○○○●のように）その最終モーラだけが急激な上昇を伴って出現している。すなわち両者のB型の文節末のモーラのピッチの実現の仕方は、まさに正反対とも言えるような様相を呈しているのである。

九州西南部二型アクセント体系を持つ現代の諸方言に見られるこのようなB型の音声的特徴の多様性は、いったいどのような通時的变化のプロセスを経て生じてきたのだろうか。本稿では、この原因を追究していくことが、九州西南部二型アクセントの通時的考察にとってひとつの重要なテーマとなり得ることを論じた。

4. おわりに

以上、本稿では、九州西南部二型アクセント体系の一つである鹿島市方言の韻律特徴の記述を行ってきた。まず鹿島市方言では、前部要素が2モーラの語根から成る複合語には一般法則が成り立つのに対して、それが3モーラ以上の語根から成る場合には、その前部要素がA型の場合も、それがB型の場合も、複合語はすべてB型となって出現することを確認した。すなわち松浦(2008, 2014)が長崎市で記述したものとまったく同じ規則性が、鹿島市方言にも見られることを報告したことになる。

また本稿では、その弁別的特徴だけに着目するといわゆる「長崎タイプ」に分類される鹿島市方言だが、そのB型の韻律型の音声実態は、長崎市のそれとは異なることを指摘した。長崎市方言のB型には全体的に平坦な音調が文節末まで持続するのに対して、鹿島市のそれは、文節末尾

の1モーラが急激なピッチの下降を伴って出現することがある。

このことに関連して本稿は、こうしたB型の韻律的特徴の発生についての一つの通時的仮説を提示した。この鹿島市方言のB型の文節末に観察されるピッチの下降は、重起伏の韻律型内部にある2つのH音調の衝突を契機にして生じた、という仮説である。

この点を説明するために本稿では、松森（2017b）にしたがい、九州の二型アクセント体系の祖体系のB型に、低く開始して文節末の1モーラだけが高い *LLLH のような韻律型を再建した。そして現代の佐賀県の二型アクセント体系では、このB型の祖型 *LLLH にあらたに語頭隆起によりH音調が生じ、*LLLH > *HLLH のような変化によって、重起伏の音調が生まれたと推定した。そして鹿島市方言の祖体系では、そのB型の重起伏の韻律型（*HLLH）の一つ目のH音調が、歴史的変化の過程で文節の後ろのほうにずれていった結果 *HLLH > *HHLH > HHHM（HHHL）のように2つ目のH音調と衝突し、その結果、文節末モーラのH音調を低くしたとする仮説を、本稿は提示した。

あわせて本稿では、この鹿島市方言のB型に見られるような非弁別的（音声的）な特徴をあえて記述に残すことの意義についても論じた。従来の日本語諸方言の韻律研究では、主として音韻的な（弁別的な）特徴を記述することに焦点が置かれていたために、音声的な（非弁別的な）特徴は記述に残されることが少なかった。そのために通時的視点から見ると重要な音声事実が、記述から漏れてしまっていた可能性がある。

鹿島市方言のB型に見られる文節末の下降はその典型的なものである、というのが本稿の主張である。これまでの多くの記述研究では、この鹿島市方言のB型に見られる文節末モーラのピッチ下降のような音声現象を、（主としてそれが弁別的に機能していないからという理由により）記述の対象にはしてこなかった。しかし本稿では、こうした非弁別的な特徴こそが、それらの言語体系が成立するまでに経てきた通時的プロセスを知るための重要な手がかりを提供し得ることを論じてきた。

鹿島市方言を中心とする佐賀県の二型アクセント体系、およびそれを取り巻くように分布する周辺地域の二型アクセント体系の音声実態は、現在さまざまに異なる特徴を見せている。その異なりに焦点を当て、それを詳細に観察・記述・比較検討することは、今後の九州西南部の二型アクセント体系の成立過程の考察にとって、特に意義ある試みとなるだろう。

注

- 1) 本稿はJSPS科研費（A）19H00530、および国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」の研究成果の一部である。
- 2) 調査は1997年3月に行われた。話者はA氏（昭和2年生、男）とB氏（昭和6年生、女）である。データは（音響分析を行うために行ったものではないため）アナログ録音された。
- 3) 外海町はかつて長崎県の西彼杵郡にあった町で、2005年1月に長崎市に編入された。本稿ではこの方言を「旧・外海町方言」と呼ぶことにする。
- 4) この旧・外海町の韻律体系については、本稿の3.3.節でも取り上げる。
- 5) 松浦（2014：22-28）の音響分析によれば、長崎市方言のA型の下降の音声実現は、東京方言のアクセント核の直後に出現するピッチ下降とは異なり、その第2モーラのピッチの頂点から文節末のモーラにかけて直線的に下降していくような韻律型を持つ。したがって（1）に示したような第1モーラあるいは第2モーラ直後に急激な下降を意味する] のような記号を付ける方法は、長崎方言のA型の音声実態を忠実に反映しているとは言えない可能性がある。しかし本稿では、暫定的にこの記

号と記述方法を採用しながら記述を行う。

- 6) ただしこれは筆者が聴覚印象にもとづいて判断したもので、音響分析によって確認した結果ではない。
- 7) 松森 (2005) は、従来のほとんどの記述研究が調査の現場で即座に音韻の解釈をほどこしたうえで、弁別の特徴のみを記述に残し、余剰的・非弁別の特徴を記述から排除してきたことを指摘し、そうした方針を貫くことによって、通時の研究にとって重要な情報が記述から漏れてしまっていた可能性があると論じている。
- 8) これは本稿の筆者が聴覚印象だけによって判断した結果であることを、ここで断っておかねばならない。現時点ではA型とB型が「同程度の下降を持つ」という判断しかできないが、将来デジタル録音で質の高い音声データを集めたうえで音響分析を行えば、この条件のもとでもA型とB型の韻律型が「質的に異なる (下降の度合いが明らかに違う)」ことが証明される可能性は十分ある。
- 9) 「カガンバコ (A)」の (A) の部分は、ここでは平山 (1951: 137) に記されている通りに引用してあるが、韻律型からみて、これは (A) ではなく (B) の誤植であろう。
- 10) 平子・五十嵐 (2016a: 96) は、佐賀県旧杵島郡の杵藤方言においても同様な規則が存在することを報告している。また松森 (2017b) では、佐賀県藤津郡の太良町でも同様な規則性が見られると報告している。
- 11) このような型の中和は、長崎県やその周辺のすべての二型アクセント体系を通じて観察されるというわけではない。松森 (2017a, b) は、長崎市と同じ県内にある旧・外海町や波佐見町の韻律体系では、たとえ前部要素が3モーラ以上になったとしても、複合語の一般法則が成り立っている (すなわち型の中和が生じていない) ことを報告した。また松森 (2018) は、熊本県芦北町田浦方言でも複合語における一般法則が成立することを報告している。
- 12) なお現時点では、前部要素が1モーラの語根の場合については、検討できるだけの十分なデータが集められていない。調査では「葉桜、夜桜、帆柱、茶柱、小魚、酢魚、子ネズミ、野ネズミ、戸袋、手袋」などの例を用意したが、聴覚印象だけでこれらの韻律型を記述するのは困難と判断した。これは、今後の課題としたい。
- 13) 「虫籠 (ム [シカ] ゴまで)」と「梨籠 (ナ [シカ] ゴまで)」は、語頭から数えて (2モーラ目ではなく) 3モーラ目直後に下がり目が生じており、一見A型の韻律型の例外のように見える。しかしこれは、おそらく2モーラ目の「シ」の音節の狭母音が (無声子音に挟まれているために) 無声化していることに伴って生じた現象であろう。無声化した母音を持つ音節には高い音調の山を置くことができないために、ピッチの頂点が3モーラ目にずれたものと考えられる。
- 14) 注6や注8にも述べたが、これはあくまで聴覚印象に基づいた判断である。この条件のもとでA型とB型の韻律型が完全に中和しているかどうかについては、音響分析による検討が必要である。
- 15) 太良町方言では、B型の3モーラ以上の名詞に1モーラの助詞が後続すると ス [ズリ ↓ ガ (硯が)、ク [ツバコ ↓ ガ (靴箱が) のように、その助詞がやや低く聞こえることがある。筆者の聴覚印象では、この太良町方言のB型の文節末に観察される下降は、鹿島市方言のB型の文節末に観察される下降と比較すると、その下降の程度がゆるやかである。
- 16) 平子・五十嵐 (2016b) は、調査した玉名市方言の話者のうちの一人の発話では、3モーラ以上のB型の名詞が後続の助詞の有無に関係なく、ア [タ] マ (頭)、ス [ボン] ジ (スポンジ) のように、その文節の末尾モーラにピッチの下降を伴った型で実現することを報告している。
- 17) これは声調言語によく起こるいわゆる「ダウンステップ」という現象で、特にアフリカ大陸のサハラ砂漠より南の地域で話されている諸言語に頻繁に観察・報告されている (Connell 2011)。これは出自の異なる2つのH音調が連続した場合に、HLH→HHM のように、後ろのH音調が中くらいの高さまでピッチが低くなる現象で、このような過程によって音韻的なM音調があらたに体系内に生じるという通時の変化もあり得る (Bybee 2015: 68) ことも知られている。
一般にダウンステップはアジアの言語には報告が少ない (Connell 2011: 830) とされている。しかし私見では、日本語の諸方言の中にはこのダウンステップの事例が数多く存在するのではないかなと思われる。たとえば讃岐諸方言に観察・報告されているいわゆる「下降式」は、文節の頭において2つのH音調が衝突することによって生じたもので、これも一種のダウンステップによって生まれたものである。
- 18) 衝突した2つのH音調のうちの後ろのほうが、(前のH音調より「やや」低まるのではなく) L音調と呼べる程度にまで低くなって実現するという現象も、声調言語には起こり得ることが知られており (Connell 2011: 834)、この現象はMeeussen (1970) 以来 'total downstep' と呼ばれている。本

稿で記述した鹿島市方言のB型の文節末モーラに観察されている急激な下降は、まさにこのtotal downstepによって生じた現象ではないかと想定される。

- 19) これに対し長崎市を中心とする、平坦な韻律型がB型に観察される諸方言では、いったんB型に生じた重起伏音調が、*HLLH > *HHLH > HHHH のような一連の変化の過程を経て、最終的にはその重起伏音調を解消して平坦な韻律型へと変化を遂げた、と松森（2017b）は推定している。
- 20) 松森（2017b）は九州二型アクセントの祖体系に、次のような二型アクセント体系を再建した。

	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語	6拍語
A型	*LH(LHL)	*LLH(LLHL)	*LLHL	*LLHLL	*LLHLLL
B型	*LH(LLH)	*LLH(LLLH)	*LLLH	*LLLLH	*LLLLLH

ここから分かるように松森（2017b）は、B型の祖型に *LLLH のような、低く始まり文節末の1モーラだけが高いような韻律型を想定している。

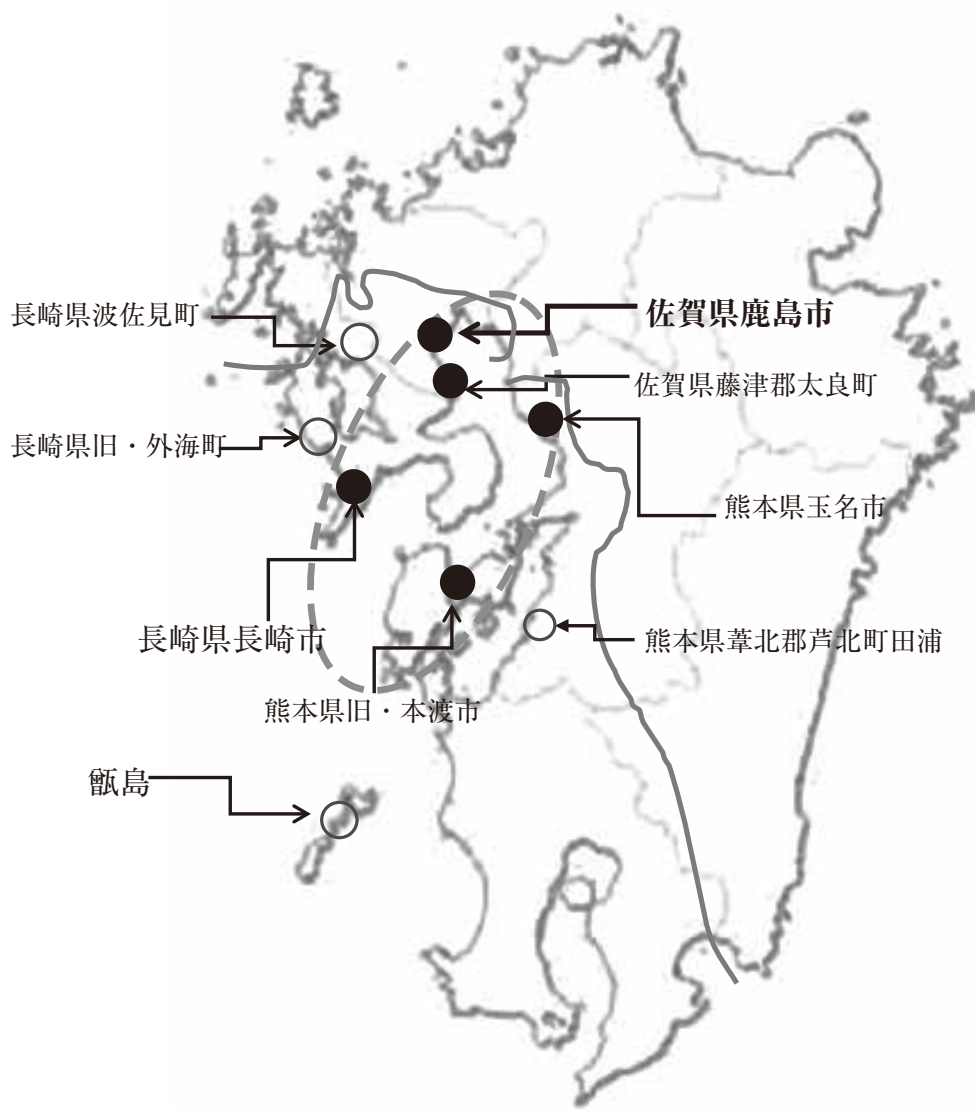
- 21) 一般的にひとつのアクセント単位内にH音調の山が二箇所に分かれて生じる重起伏の韻律型は、アクセントの持つ境界表示機能のためにはあまり望ましい型とは言えないので、消滅し、より安定した別の型へと変化していきやすい（松森2017b：60-61）。したがって鹿島市でも、長崎市でも、それぞれ独立して重起伏の型を別の韻律型へと変化させるような動きが生じたとしてもおかしくない。
- 22) もちろんこのことは（20）や（21）の方言が、過去の重起伏の韻律型を現時点に至るまでそのまま保存しているという意味ではない。これらの体系内のB型はそれぞれ、佐賀県の諸方言とは独立して重起伏の型になった可能性があるのもあって、したがってその重起伏の型の成立時期は、佐賀県の諸方言のそれとは異なる可能性が高い。
- 23) このことから見て、鹿島市方言を代表とする佐賀県の二型体系を取り巻くように分布している諸体系の中には、今後もそのB型に重起伏音調が観察される体系が発見される可能性が高いという予測が建てられる。
- 24) 松森（2017b）は、その最終段階の変化（*HHLH > HHHH（HHHH））が起こったことを契機にして、複合語の2種類の型が同じ韻律型に合流したと推定し、それによって現代の佐賀県や長崎県に見られる複合語における型の中和現象を説明する試みを行った。また松森（2017b）は、佐賀県や長崎県のB型の韻律型の発生の原因について考察することは、複合語の一般法則の例外がどうして発生したのかを解明するための重要な手がかりとなり得ることも論じている。
- 25) 平山（1951：137）は、佐賀県と長崎県の韻律体系の系統的近さを認めながら、次のような記述を残している。「ただ違う所はB型の相である。即ち、佐賀の平板に対して長崎の尾高が存在していることである。」平山（1951）がその1951年の著書の中で記述した「長崎の尾高」とは、現在の長崎市に観察されているような平坦なB型の韻律型のことを指すのではなく、現代の波佐見町に典型的に見られるようなB型の韻律型のことを指しているのではないだろうか。この波佐見町に観察されているような、文節の最終モーラだけが急激に上昇するようなB型は、地理的に見て、長崎県のどのあたりに分布しているのだろうか。またそれは、どれくらい広範囲にわたって分布しているのだろうか。この点については、今後のさらなる調査が必要である。
- 26) 松森（2017b）は、長崎県の波佐見町方言に見られるように、B型の文節の最後のモーラが急激に上昇する韻律型や、（20）の長崎県の旧・外海町方言のようにそのB型に重起伏の韻律型が見られる二型アクセント体系には、複合語の型の中和が見られない（つまり一般法則が成立する）という観察結果を報告している。また本稿の（21）で見た熊本県芦北町の田浦方言にも複合語の型の中和は見られない（一般法則が成立する）という報告が、松森（2018）によって成されている。つまり、B型の持つ韻律特徴と複合語の型の中和との間には相関関係が見られるという事実を、これまでに松森は記述・報告していることになる。

参考文献

- Bybee, Joan (2015) *Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Connell, Bruce (2011) Downstep. *The Blackwell Companion to Phonology*. Vol. II: 824-847. Wiley-Blackwell.
- 平子達也・五十嵐陽介 (2016a) 「佐賀県中南部諸方言の二型アクセントについて」『実践国語学』第89号：(18)-(56).
- 平子達也・五十嵐陽介 (2016b) 「熊本県玉名市方言のアクセントについての初期報告」『実践女子大学文

- 学部 紀要』第58号：1-22.
- 平山輝男（1951）『九州方言音調の研究』東京：学会之指針社.
- 木部暢子（2012）「西南部九州2型アクセントの特性の比較—助詞・助動詞のアクセントを中心として—」『音声研究』第16巻第1号：80-92.
- 松森晶子（2005）「日本語アクセント記述の今後の課題—通時的考察をふまえて—」『日本女子大学紀要 文学部』第54号：87-100.
- 松森晶子（2016）「複合語アクセントが日本語史研究に提起するもの」『国立国語研究所論集』第10号：135-158.
- 松森晶子（2017a）「長崎県西彼杵郡旧・外海町の二型アクセント体系」『日本女子大学紀要 文学部』第66号：31-46.
- 松森晶子（2017b）「九州二型体系の複合語アクセント型はなぜ中和するのか—通時的視点から探る—」『日本語の研究』第13巻4号：51-67. 日本語学会
- 松森晶子（2018）「熊本県葦北郡芦北町田浦方言の二型アクセント体系」『日本女子大学紀要 文学部』第67号：15-37.
- 松浦年男（2005）「島原市方言における複合語音調の中和と外来語音調」『音韻研究』8：49-57.
- 松浦年男（2008）「長崎市方言における例外的複合語アクセントの生起条件」『音韻研究』11：11-19.
- 松浦年男（2014）『長崎方言からみた語音調の構造』東京：ひつじ書房
- Meeussen, A. E. (1970) Tone typologies for West African languages. *African Language Studies* 11: 266-271.
- 坂口至（2001）「長崎方言のアクセント」『音声研究』第5巻第3号：33-41.

図1：B型の文節末尾の1モーラのピッチが上昇する体系（LLH, HLHなど）
 B型の文節末尾の1モーラのピッチが下降する、あるいは文節全体の
 ピッチが平坦な体系（HHL, HHM, HHH, MMMなど）



注：地図上の曲線は、平山 1951に基づいて作成した二型アクセント体系の境界を示す。この曲線の下部（九州西南部）に二型アクセント体系が分布している。